

「集談会でも同じ質問ばかり」

このころ（昭和四十九年ごろ）、生活の発見会にも入会して、昭和五十一年から五十二年ごろには、S集談会やO集談会にも、時々、出席させていただきましたが、いつも同じような質問をしていたように思います。当時の私としては、現実の問題として、部下を十分掌握できないことに悩み、真剣であるからこそ、いつも同じ質問をしていたのですが、あまりにも真正面から向かっていき、かえって問題をこじらせていたようです。人間性に対する理解は、今も決して十分と申すにはほど遠いですが、当時はずいぶん、青くさかったのだと思います。

思い悩んで馬杉先生のお宅に個人相談におうかがいして、先生から「仕事に生命をかけているか」と問われ、どうしてそんなことを聞かれるのか、その理由もわかりませんでした。とても「仕事に生命をかけている」とはほど遠い温室育ち的な気分がまだぬけていなかったので、両親のもとで、ぬくぬくとした恵まれた生活の中で、自分の家族は一応自分で養っていながら、まだ、自分だけで起こってくるもの全部を背負って生きていく覚悟ができていませんでした。

まわりを見まわしてみると、私よりもっと若い人でも、もまれている人は、早くから、生きることの覚悟ができています。だから、たとえ会社で辛い目にあっても、目にわかるほどしゅんとしたり、しょっちゅうグチをこぼしたりせずに、むしろ、したたかに笑顔すら見せて耐えてゆくのです。当時の私は、その人たちを見て、あの人たちは神経の構造が違っていてタフだし、要領がいいのだ、自分はともああいまねはでないとか、あの人は自分の分際をよくわきまえており、苦労しても当然耐えてゆけるのだ、とかいうふうには、思いあがりやと羨望の入り混じった気持ちで見えていました。その人たちの苦労や努力を思いやろうとも学ぼうともせず、自分は要領のいい人間ではないから、とてもああいふふうにはなれないと、離れた距離から見ただけでした。ずいぶんもつたいたいなことをしたと思います。しかし、この時期も決して無駄ではなかったのです。

（続）